

屁

新美南吉

青空文庫

石太郎いしたろうが屁への名人であるのは、浄光院じようこういんの是信ぜしんさんに教えてもらうからだ、みんながいつていた。春吉君はるきちは、そうかも知れないと思った。石太郎の家は、浄光院のすぐ西にあったからである。

なにしろ是信さんは、おしもおされもせぬ屁へこきである。いろいろな話が、是信さんの屁について、おとなたちや子どもたちのあいだに伝えられている。是信さんは、屁で引導いんどうをわたすという。まさかそんなことはあるまいが、すいこ屁き（音なしの屁）ぐらいは、お経きようの最中にするかもしれない。

また、ある家の法会ほうえで鐘かねをたたくかわりに、屁をひってお経を

あげたという。これも、おとながおもしろ半分につくったうそらしい。だが、これだけはたしかだ。是信さんは、正午の梵鐘ぼんしょうをつきながら、鐘の音の数だけ、屁をぶっぱなすことができるということである。春吉君は、じぶんでその場面を見たからだ。

石太郎が是信さんの屁弟子でしであるといううわさは、春吉君に、浄光院の書院まどの下の日だまりに、なかよく日なたぼっこしている是信さんと、石太郎のすがたを想像させた。茶色のはん点がいっぱいある、赤みがかったつやのよい頭を日に光らせ、洗いふるしたねずみ色の着物の背せをまるくしている、年よりの是信さん。顔のわりあい耳がばかに大きい、まるでふたつのうちわを頭の両側につけているように見える、きたない着物の、手足があかじ

みた石太郎。

きつと石太郎は、学校がひけると、毎日信さんとそういう情景をくり返しながら、^へ屁の修^{しゅぎょう}業をつんでいるのだろう。まったくかれは屁の名人だ。

石太郎は、いつでも思いのままに、どんな種類の屁でもはなてるらしい。みんなが、大きいのをひとつたのむと、ちよつと^{むなざ}胸算用^{んよう}するようなまじめな顔つきを^{んよう}して、ほからかに大きい屁をひる。小さいのをたのめば、小さいのを連発する。にわとりがときをつくるような音を出すこともできる。こんなのは、さすがに石太郎にもむずかしいとみえ、しんちようなおもちで、からだ全体をうかせたりしずめたり——つまり、調子をとりながら

出すのである。そいつがうまくできると、みんなで拍手かつさいしてやる。

しかし石太郎は、そんなときでも、屁をくらったような顔をしている。その他、とうふ屋、くまんばち、かにのあわ、こごと、汽車など、石太郎の屁にみんながつけた名まえは、十の指にあまるくらいだ。

石太郎が屁の名人であるゆえに、みんなはかれをけいべつしていた。下級生でさえも、あいつ屁えこき虫と、公然指さしてわらった。それを聞いても、石太郎の同級生たちは、同級生としての義憤ぎふんを感じるようなことはなかった。石太郎のことで義憤を感じるなんか、おかしいことだったのである。

石太郎の家は、小さくてみすばらしい。一步中にはいると、一種異様なにおいが鼻につき、へどが出そうになる。そして、暗いので家の中はよく見えない。石太郎は、病気でねたつきりのじいさんとふたりだけで、その家に住んでいる。

どこかへかせぎに出ているおとつあんが、ときどき帰ってくる。おつかあは、早く死んでしまつて、いない。石太郎は、ポンツク（川かわりよう漁）にばかりいく。とつてきたふなや、どじょうを、じいさんにたべさせる。また、買いにいけば、どじょうやうなぎを売ってくれるということである。

石太郎の着物は、いつ洗つたとも知れず、あかでまつ黒になつている。その着物に、家の中のあの貧乏びんぼうのにおいや、ポンツク

のなまぐさいにおいをつけて、学校へやってくる。そのうえ、注文されなくてもかれは、ときおり放屁^{ほうひ}する。

みんなは、石太郎のことを、屁^へえこき虫としてとりあつかっている。石太郎のほうでも、そのほうがむしろ気楽なのか、一どもふんがいたことはない。生徒ばかりでなく、たいていの先生まで、石太郎を虫にしているので、石太郎は、だんだんじぶんでも虫になっていった。かれは、教室で、いちばんうしろに、ひとりでふたり分のつくえをあたえられていたが、授業中にあまり授業に注意しなかった。たいていは、ナイフで鉛筆に細工^{さいく}していた。またかれは、まじめになるときがなくなってしまった。屁の注文をうける場合のほかは。かれは、いつもぐにやぐにやし、えへら

えへらわらっていた。

春吉君は、一ど、石太郎のことで、じつにはずかしいめにあつたのである。

それは五年生の冬のことである。三年間受け持っていたいた、年よりの石黒先生が、持病じびょうのぜんそくが重くなつて、授業ができなくなり、学校をおやめになつた。かわりに町から、わかい、ロイド眼鏡めがねをかけた、かみの長い藤井先生ふじいがこられた。

春吉君の学校は、かたいなかの、百ひやくしやう姓の子どもばかり集まつている小さい学校なので、よそからこられる先生は、みな、都会人のように思えたのだつた。藤井先生をひと目見て、春吉君はいきづまるほどすきになつてしまった。文化的な感じに魅みせられ

たのである。石黒先生もよい先生であつたが、先生は生まれが村の人なので、ことばが、生徒や村のおとなたちの使うのとほとんど変わらないし、年をとつていられるので、体操^{たいそう}など、ちつとも新しいのを教えてくれない。走りあいか、ぼうしとりか、それでなければ、砂場ですもうをとらせる。いちばんいやなのは、話をしてゐる最中に、せきをしはじめることである。長い長い、苦しげなせき。そして、長いあいだ、さんざ苦勞をしたあげく、のどからやつと口までうち出したたんを、ポケットに入れて持つてゐる新聞紙のたたんだの中へ、ペツペツとはきこみ、その新聞紙を、まただいいじそうにポケットにしまうのである。

さて、藤井先生が、はじめて春吉君の教室にあらわれた。はじ

めて生徒を見る先生には、生徒は、みないちように見える。よく、それぞれの生徒の生活になれると、それぞれの生徒の個性がはつきりしてくるが、顔を最初見たばかりでは、わからない。だれがりこうで、だれがしようもないあほうであるかも、わからない。

藤井先生はまず、教^{きょうたく}卓のすぐ前にいる坂^{さかいち}市君にむかつて、「きみ、読みなさい」といった。それは読み方の時間だった。

「きみ」ということばが、春吉君をまた喜ばせた。なんという都会ふうのことばだろう。石黒先生はこんなふうにはよばなかった。

先生は、生徒の名を知りすぎていたから、「源^{げん}やい読^てめ」とか、「照^てン書け」とかいったのである。

坂市君が読んでいきながら、知らない字をのみこむようにして

とぼしたり、あいまいにごまかしたりすると、石黒先生はそんなのをほったらかしておかれたのに、わかい藤井先生は、いちいち、え、え、と聞きとがめられた。そんなことまで、春吉君の氣にいった。もうなにからなにまで、この先生のすることはよかつた。

藤井先生は、坂市君から順順にうしろへあてられた。四人めには、春吉君がひかえている。春吉君は、この小さい組の級長である。春吉君は、きりつとした声をはりあげて、朗々ろうろうと読み、未知のわかい先生に、じぶんが秀才であることをみとめてもらうつもりで、番のめぐつてくるのを、いまやおそしと待っていた。

いよいよ春吉君の番だ。春吉君は、がたつとこしかけをうしろへのけ、直立不動のしせいをとり、読とくほん本を持った手を、思いき

り顔から遠くへはなした。そして、大きくいきをすいこみ、いまや第一声をはなとうとしたとたん、つごうのわるいことが起こった。ちようどそのとき、藤井先生は、きかんじゆんし机間巡視の歩を教室のうしろの方へ運んでいられたが、とつじよ、ひえつというような悲鳴をあげられ、鼻をしつかとおさえられた。

みんながどつとわらった。また、へ屁えこき虫の石が、例のくせを出したのである。

なんというときに、また、石太郎は屁をひつたものだろう。春吉君は、すかをくらわされたように拍ひょうし子ぬけして、わらえもしなければおこれもせず、もじもじして立っていた。

藤井先生はまゆをしかめ、あわててポケットからとり出したハ

ンケチで、鼻をしつかとおさえたまま、こりやひどい、まったくだ、さあまどをあけて、そつちも、こつちもと、さしずされ、しばらくじつとしてなにかを待っていられたが、やがて、おそろおそろハンケチを鼻からとられ、おこつてもしようがないというように、はっはつと、顔の一部分でみじかくわらわれた。だがすぐきつとなられて、だれですか、今のは、正しょうじき直に手をあげなさいと、見まわされた。

石だ、石だ、と、みんながささやいた。藤井先生は、その「石」をさがされた。そして、いちばんうしろの壁かべぎわに発見した。石太郎は、新しい先生だからてれくさいとみえて、つくえの上に立てた表紙のぼろぼろになった読とくほん本のかげに、かみののびた頭を

かくすようにしていた。

立っていた春吉君は、そのとき、いい知れぬ羞恥しゆうちの情じようにかられた。じぶんの組に、石太郎のような、不潔ふけつな、野卑やひな、非文化的な、下劣げれつなものがいるということを、都会ふうの、近代的な明るい藤井先生が、どうお考えになるかと思うと、まったく、いたたまらなかつた。

藤井先生は、相手を見てすこしことばの調子をおとしながら、いろいろ石太郎にきいたが、要領を得なかつた。なにしろ石は、くらげのように、つくえの上でぐにやつくばかりで、返事というものをしなかつたからである。

そこで近くにいる古手屋の遠助とおすけが、とくいになって説明申し

あげた。まるで見世物の口上こうじょう 上 いいののように、石太郎はよく屁へをひること、どんな屁でも注文どおりでできること、それらには、それぞれ名まえがついていること等とうとう等。

春吉君は、古手屋の遠助のあほうが、そんなろくでもないことを、手から顔して語るのを聞きながら、それらのすべてのことを、あかぬけのした、頭をテカテカになでつけられた藤井先生が、どんなにけいべつされるかと思つて、じつにやりきれなかったのである。

一年おきにやってくる、町の小学校との合同運動会でも、春吉君は、石太郎の存在をうらめしく思つた。その日には春吉君の学校は、白いべんとうのつつみを背中せなかにしよつて、半里ばかりの道

を、町の大きい小学校へやっていく。大きなりっぱな小学校である。木づくりの古い講堂があり、えび茶のペンキでぬられた優美な鉄さくが、門の両方へのびていつている。運動場のすみには、遊動円えんぽく木や回旋塔かいせんとうなど、春吉君の学校にはないものばかりである。ここの小学校の生徒や先生は、みな、町ふうだ。うすいメリヤスの運動シャツ、白いパンツ、足にぬったヨジウム。そして、ことばが小鳥のさえずりににて軽快だ。

春吉君は、一步門内にはいるときから、もうじぶんたち一団のみすばらしさに、はずかしくなってしまう。なんという生せい彩さいのないじぶんたちであろう。友だちの顔が、さるみたいに見える。よくまあこんな、べんとう風ふう呂敷ろしきをじいさんみたいにしよつてき

たものだ。まったくやりきれないなかふうだ。

こういう意識いしきが、運動会のおわるまで、春吉君の中でつづく。

ちよつとでも、じぶんたちのふていさいなことをわらわれたりすると、春吉君はつきとばされたように感じる。町の見物人たちのひとりが、春吉君のことを、まあ、じょうぶそうな色をしてと、つぶやいたとしても、春吉君は恥辱ちじよくに思うのである。町の人がおどろくほどの健康色、つまり、日焼けしたはだの色というものは、町ふうではなく在郷ざいこうふうだからだ。

ある人びとは、保護色性ほごしよくせいの動物のように、じき新しい環かんきよ

境うに同化されてしまう。で、藤井先生も、半年ばかりのあいだに、すっかり同化されてしまった。つまり都会気分がぬけて、い

なかじみてしまった。洋服やシャツはあかじみ、ぶしようひげはよくのびており、ことばなども、すっかり村のことばになつてしまった。「なんだあ」とか、「とろくせえ」とか、「こいつがれ」などと、春吉君がそのことばがあるがため、じぶんの故郷こきようをきらっているような、げびた方言を、平気で使われるのである。春吉君が、藤井先生も村の人になつたということをしみじみ感じたのは、麦のかられたじぶんのある日だった。

午後の二時間め、春吉君たちは、校庭のそれぞれの場所にじんとつて、水彩の写生をしていた。小使室のまど下に腰をおろして、学校のげんかんと、空色にぬられた朝礼台と、そのむこうのけしのさいているたんざく型の花だんと、ずうつと遠景にこちらをむ

いて立つて二宮金次郎の、本を読みつつまきをせおって歩いて
 いるみかげ石の像とをとりいれて、一心に彩筆さいひつをふるっていた
 春吉君が、ふと顔をあげて南を見ると、学校の農場と運動場のさ
 かいになつてゐる土手どての下に腹ばつて、藤井先生が、なにか土手
 のあちら側にむかつてあいずをしていられる。

いちはやく気づいたものがもうふたり、ばらばらとそちらへ走
 つていくので、春吉君も画板がばんをおいてかけつけると、土手の下に、
 水を通ずるため設けてある細い土管の中へ、竹ぎれをつつこんで
 いる先生が、落ちかかつて鼻の先にとまつてゐる眼鏡めがねごしに春吉
 君を見て、

「おい、ぼけんと見とるじゃねえ、あつちいまわれ。こん中にい

たちがはいつとるだぞ。今こつちからつつくから、むこうで、
屁^へえこき虫といつしよにかまえとつて、つかめ。にがすじやねえ
ぞ」

と、つばをとばしながらおつしやつた。

むこう側へこしてみると、なるほど、屁えこき虫の石太郎が、
このときばかりはじつにしんけんな顔つきで、そのどろみぞの
中にひぎこぶしまではいつて、土管の中へ、右手をうでのつけね
までさし入れている。うでをすっかり土管の中につつこんでいる
ので、しぜん頭が横むけに土手の草におしつけられ、なにか、土
手の中のかすかな物音に、耳をすまして聞いているといった風情^{ふぜい}
である。

じき近くにあるあひる小屋にいる二わのあひるが、人のけはいでひもじさを思い出したのか、があがあとやかましく鳴きだした。春吉君は、どろみぞの中へとびこんでいく気にはなれなかったし、石太郎が土管のあなを受け持っているからには、よけいな手だしはしないほうがいいので、ほかのものといっしょに見ていた。「ええか、ええかあ、にがすなよおつ」

という藤井先生の声が、地べたをはつてくる。石太郎はだまつて、依然、^{いぜん}土手の声に聞き入っていたが、やがて、土手についていたもう一方の手が、ぐつと草をつかんだかと思うと、土管の中から、右手を徐々^{じょじょ}にぬきはじめた。

首ねつこを力いっぱいにぎりしめられていた大きなたちは、

窒^{ちくそく}息のためもうほとんど死んだようになっていて、土管の外へ出ると、だらりとえりまきを見るようにぶらさがったが、すこし石太郎が手をゆるめたのか、なにかき落とそうとするように、四肢^しをもがいた。するとそのとき、どろみぞからあがつていた石太郎は、ちくしようと口ばしつて、目にもとまらぬ敏^{びん}捷^{しょう}さで、いたちを地べたへたたきつけた。

ぼたつと重い音がして、古いたちは、のびてしまった。春吉君は、いつも水藻^{みずも}のような石太郎が、こんなにはつきり、ちくしうつという日本語を使ったこともふしぎだったし、こんなにすばしこい動作^{どうさ}ができるということも不可解な気がした。

それはともかく、そのとき春吉君は、藤井先生が、このかたい

なかの、学問のできない、下劣げれつで野卑やひな生徒たちに、しごく適した先生になられたことを感じたのである。といつて、べつだん失望したわけでもない。けつきよく、親しみをおぼえて、それがよかつたのだ。

藤井先生は、石太郎ととらえたあのいたちを、へびつかみの甚じ太郎んたろうに、二円三十銭で売った。その金で、小使のおじさんと一ぱいやつたという話を、二、三日して春吉君は、みんなからだおもしろく聞いた。先生はまだ独身で、小使室ねおのとなりの宿直室で寝起ねおきしていられたのである。

教室でも先生が変化したことは、同じことだった。坂市君や、源五兵衛君げんごべえや、照次郎君てるじろうなどが、知らない文字をうのみにして

読^{とく}本^{ほん}を読んでいても、最初のころのように、え、え、と、優美にとがめるようなことはされなくなった。年よりの、ぜんそくもちの石黒先生と同じように、知らんふりしてズボンのポケットに両手をつつこんで、つくえのあいだを散歩していられるのであった。

こういうぐあいには、すべての点で藤井先生はいなかの気ふうにならされ、のみならず、いなかふうをマスターするようにさえなつたのだが、石太郎の、授業中にときどき音もなくはなつ屁^へにだけは、あくまで妥協できなかつたのである。

情景はおおよそ、次第^{しだい}がきまつていた。まず最初にそれを発見するのは、石太郎の前にいる学科のきらいな、さわぐことのすき

な、顔ががまににている古手屋の遠助^{とおすけ}である。かれは、先生のまじめなお話などいささかもわからないので、どんなに、クラス全体が一生けんめいに先生の話に傾^{けい}聴^{ちやう}しているときでも「あつ、くさつ、あつ、あつ」といいだす。

すると、教室のその一角^{かく}から、「あつ、くさつ、あつ、くさつ」という声が、波紋^{はもん}のようにひろがり、ざわめきだす。すると藤井先生は、あわててハンケチを胸のポケットから出す。（あまり倉^そ卒^{うそつ}にとり出すので、頭髪^{とうはつ}をすく小さいくしが、まつわつてとび出したこともある）ハンケチで鼻をしっかりとおさえる。鼻声で、まどをあけろ、まどを、そつちも、こつちもと、下知^{げち}なさる。それから南のまどぎわへ歩いていって、外の空気をすうために、

ややハンケチをおはなしになる。藤井先生のいつもきまった動作がおもしろいので、生徒らは、男子も女子も、ますます、くさいとさわぐ。すると、古手屋の遠助が、きようは大根屁だいこんぺだとか、きようはいも屁だとか、きようは、えんどう豆屁だとか、正確にかぎわけて、手から顔にいうのである。

みんなは、遠助の鑑識かんしき眼を信用しているので、かれのいったとおりのことばを、また伝えはじめる。

「あ、大根屁だ。大根くせえ」

というふうに。ようやく喧騒けんそうが大きくなつたころ、先生は、

「だれだつ」

と一かつされる。一同はぴたつと沈黙する。そして申しあわせた

ように、教室の後方に頭をめぐらす。みんなの視線の集まるところに、屁えこき虫の石太郎が、てれた顔をつくえに近くさげて、左右にすこしずつゆすつているのである。

その せいじやく 静寂の時間がやや長くつづくと、石だ、石だ、という

声が、こんどはだれいうとなく、石太郎よりもっとも遠い一角より起こってくる。藤井先生は黒板のうらがわにかけてある竹のむちを持って、つかつかと石太郎のところへいき、いいかげんにしとくと、むちのえで、石太郎のこめかみをこづかれる。そのときは先生も、石太郎と協力してとった古いたちの代で、一ぱいいけたことは、忘れていられるように見えるのである。

こういう情景は、もうなんどくり返されたかしれない。いつも

判でおしたかのごとく同じ順序で。

秋もはじめのころの、学校の前の松の木山のうれに、たくさん
のからすがむれて、そのやかましく鳴きたてる声が、勉強のじや
まになる、ある晴れた日の午後であつた。

春吉君たちは、六時間めの手工しゅこうをしていた。その日の手工は、
かわら屋の森一君がバケツ一ぱい持ってきたねんどで、思い思い
の細工さいくをするのである。

春吉君は茶のみ茶わんをつくっていた。ほんとうの茶わんのよ
うに、土をうすく、しかも正しい円形につくることは、なかなか
よういではない。すでになんべんも、できあがつた茶わんが意に
みたず、ひねりつぶし、またはじめからやりなおしていた。そし

てついに、こんどこそはと思われる逸品いっぴんができあがりつつあった。春吉君は、細心の注意をはらって、竹べらをぬらしては、茶わんのはらの凹凸おうとつをならしていった。

すっかり茶わんに心をうばわれ、ほかの、いっさいのことを忘れていたが、ふとわれに返った春吉君は、「しまった」と思った。朝からすこし腹ぐあいが変わるく、なにか重いものが下腹いつたいにつまっている感じで、ときどき、ぷつぷつと豆のにえるような音もしていたので、ゆだんすると屁へをするぞと、心をいましめていたのだが、ついに、しごとに熱中していて、今その屁を音もたえずにしてしまったのである。おかげで腹がかるくなつたが、腹のかるくなるほどの屁というものは、はげしい臭気をともなつて

いるはずだと、春吉君は思った。

うまくだれも気づかずにくれればよいがと、春吉君はひそかに願った。ならびの席にいる源五兵衛君は、げんごべえ鼻じるをすすりながら、ぶかつこうに大きな動物——たぶん、かめだろうと思われるが、ともかく四足動物の四本めの足をくつつけようと努力している。うしろの照次郎君も、よのすけ与之助君も、それぞれの制作に余念がない。

すこし時間がたった。春吉君はたすかったと思った。と、そのせつな、古手屋の遠助が、あ、くせ、と、第一声をはなつた。すぐに、くせえ、くせえ、という声が、四方に伝わった。春吉君は、はずかしさで顔がほてってきた。

いつもと同じさわぎがはじまった。屁えこき虫の石太郎が屁をはなつたときと、すんぶん寸分ちがわぬことが。

春吉君は、どうしていいのかわからない。もう、なりゆきにまかすばかりだ。

やがて古手屋の遠助が、きようは大根菜屁だいこんなっぺだといった。なんという鋭敏えいびんな嗅覚きゅうかくだろう。たしかに春吉君は、けさ大根菜のはいったみそしるでたべてきたのである。

やがてさわぎが大きくなりだしたころ、藤井先生が例によつて、「だれだつ」

とどなられた。春吉君は意味もなくねんどをひねりながら、いきをのんで、おもて面をふせた。みんなの視線が、ちようどいつも石太郎

の上に蝟いしゅう集するように、きようは、じぶんにそそがれているのだと思ひながら。

いまにどこからか、春吉君だという声が起こってくるにそういない、と思つた。そういうふうにすっかり観かん念ねんしていたので、石だ、石だ、というあやまつた声があがつたときには、じぶんの頭上に落ちてくるはずのげんこつが、わきにそれたように、ほつとしたきみような感じになつた。

顔をあげてみると、意外にも、みんなの視線は、春吉君に集中されておらず、やはり石太郎の方にむいているのだ。

藤井先生が、黒板のうらにかかつているむちをとつて、つかつかと石太郎の前に歩いていかれる。春吉君の心の底から、正義感

がむくつと起きてきた。じぶんだといってしまおうか、しかし、だれひとり、じぶんをうたがってはいないのである。ここで白状するのは、なんともはずかしい。先生が石太郎の席に達するまでのみじかい時間を、春吉君の中で正義感と羞恥心しゆうちしんとが、めまぐるしい闘争をした。それが春吉君の動悸どうきを、鼓膜こまくにドキツドキツとひびくほど、はげしくした。そして、しばらく正義感がおさえられた。

反射的に、ねんどを親指と人さし指の腹ですりつぶしながら、春吉君は見ていた。石太郎はいつもと変わらず、てれた顔をつくえに近くゆすつている。いまに、おれじゃないと弁解するかと、春吉君がひそかにおそれながらも期待していたのに、その期待も

うらぎられた。石太郎は、むちでこめかみをぐいとおされ、左へぐにやりとよろけたが、依然^{いぜん}てれたような表情で、沈黙しているばかりである。

春吉君はよぎなく、じぶんの罪を白状させられる機会は、ついにこなかった。これでさわぎはすんでしまった。一同は、ふたたび作業にとりかかった。

しかし春吉君だけは、事がまだ終末にいたっていない。気持ちにせおいきれぬほどの負担ができてしまった。春吉君には、こんな経験は、生まれてはじめてといってもよい。春吉君はいままで、修身の教科書の教えているとおりの、正しいすぐれた人間であると、じぶんのことを思っていた。

今、じぶんが沈黙を守って、石太郎にぬれぎぬをきせておくことは、正しいことではない。じぶんは、どうどうというべきである。いまからでもよい。さあ、いまから。そう口の中でいいながら、どうしても立ちあがる勇気が出ないのであった。

春吉君はくやしきのあまり、なきたいような気持ちになつてきた。それをはぐらかすために、できあがつていただいじな茶わんを、ぐつとにぎりつぶしたのである。

*

まったくこれは、春吉君にとつて、この世における最初の、じぶんで処理せねばならぬ煩悶はんもんであつた。それは家へ歸つてからも、つぎの日学校にふたたびくるまでも、しつこく春吉君のあと

をつけてきた。たいていのなやみは、おかあさんにぶちまければ、そして場合によつては少々なけば、解決つくのだが、こんどは、そういうわけにはいかない。

だいいち、どういつておかあさんに説明したらいいのか。雑誌がほしいとか、おとうさんのだいじな鉢はちをわつてしまったとかならば、かんたんにじぶんのなやみを知ってもらえるが、これはそんなやさしいものではない。複雑さが、春吉君の表現をこえている。屁へをひつた話などしたら、まっさきにおかあさんはわらいだしてしまうだろう、とても、はじめにとつてくれぬだろう。

春吉君は、ただじぶんの正しさというものに汚点がついたのが、しやくだった。ちょうど、買ったばかりの白いシャツに、汚泥おでいの

飛沫^{ひまつ}をひっかけられたように。

石太郎にすまないという気持ちや、石太郎はぎせいに立ってえらいなという心は、ぜんぜん起こらなかった。石太郎が弁解しなかったのは、他人の罪をきて出ようというごとき高潔^{こうけつ}な動機からでなく、かれが、齒がゆいほどのぐずだったからにすぎない。

また石太郎は、なんとむちでこづかれたとて、いっこう骨身^{ほねみ}にこたえない。まるで日常茶飯事^{さはんじ}のようにこころえているのだから、いささかも、かれにすまないと思う必要はないわけである。

むしろ、石太郎みたいな屁の常習犯がいたために、こんななやみが残ったのだと思うと、かれがうらめしいのである。

しかし、ときが、春吉君の煩悶^{はんもん}を解決してくれた。十日もす

ると、もうほとんど忘れてしまった。

だが春吉君は、それからち、屁そうどうが教室で起こって、例のとおり石太郎がしかられるとき、けっしていぜんのようにかんとんに、それが石太郎の屁であると信じはしなかった。だれの屁かわからない。そしてみんなが、石だ、石だといっているときに、そつとあたりのものの顔を見まわし、あいつかもしれない、こいつかもしれないと思う。

うたがいだすと、のこらずのものがうたがえてくる。いや、おそらくは、だれにもいままでに、春吉君と同じような経験があったにそういないと考えられる。

そういうふうに、みんな狡猾こうかつそうに見える顔をながめている

と、なぜか春吉君は、それらの少年の顔が、その父親たちの狡猾な顔に見えてくる。おとなたちが、せちがらい世の中で、表面はすずしい顔をしながら、きたないことを平気でして生きていくのは、この少年たちが、ぬれぎぬをものいわぬ石太郎にきせて知らん顔しているのと、なにか、にかよっている。しぶんもそのひとりだと反省して、自己嫌悪じこけんおの情がわく。だが、それは強くない、心のどこかで、こういう種類のことが、人の生きていくためには、こうてい肯定されるのだと、春吉君には思えるのであった。

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ樁の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

初出：「哈爾賓日日新聞」

1940（昭和15）年3月23日～3月30日

入力：林 幸雄

校正：鈴木厚司

2001年9月4日公開

2013年9月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

屁

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>